

現代日本における中国出身留学生の 将来設計に関する一考察

馬 文甜 筑波大学大学院博士後期課程

キーワード：在日中国人，留学生，将来設計

2014年5月時点で、日本における外国人留学生数は約18.4万人である。そのうち、中国出身の留学生は51.3%を構成している。昨今は全体における割合を低下させつつも、依然として過半数を占めているのである。今後、日本は留学生や高度人材をさらに受け入れることが予想される。一方の中国では、国内の経済成長に伴い、留学後帰国を選択する留学生の数が増加している。したがって、日本では留学生の受入れや就職をいかに促進するか、中国では急増した帰国留学生とどう向き合うべきかという課題がある。そしてその際には、将来設計についての中国人留学生の意識に注目する必要がある。本稿は、中国人留学生が多様な背景を持つことに留意し、日本において学業を修了した後の中国人留学生による日本での滞在／母国への帰国に関する選択、それに作用する彼（女）らが置かれた経済社会的環境の理解を目的としている。具体的には、留学生の出身地、配偶者・恋人の有無、一人っ子といった属性などの諸要因が、日本で学業を修めた中国人留学生の将来設計に与える影響について、アンケート及びインタビュー調査を通じて分析している。

1 研究背景と目的

日本における留学生受入れは、中曽根康弘首相（当時）の時代、いわゆる「10万人計画」が策定されてから本格化する。10万人計画のもとで、留学生数が急増した時期は二つあった。一つ目は1983年から1992年にかけてである。この期間には、留学生受入れ数が約1万人から約4.9万人に増加し、目覚ましい伸びを見せた。そのなかでも、中国人留学生数は、約2千人から約2万人へと10倍の伸び率であった。2000年以降にも、留学生受入れ数は再び急速に増加している。2000年に約6.4万人であった留学生総数は、4年程の間に約11万人に達した。中国人の留学生は、1993年の約2.2万人から2003年の約7.1万人へと急増し、10万人の目標達成に欠かせない役割を果たした。

日本では、2007年頃から、再び留学生の受入れ拡大に関する議論が始まった。2008年7月には、文部科学省ほか関係省庁が、「留学生30万人計画」（以下「30万人計画」と称す）の骨子を策定している^{*1}。30万人計画は、日本を世界により開かれた国とし、世界におけるヒト・モノ・カネ、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として、2020年を目途に30万人の留学生受入れを目指すものである（文部科学省、2008）。この議論の背景には、世界各国が優秀な人材を求めるなかで国

際的な頭脳獲得競争に勝つためには、高等教育の段階から人材をリクルートしていくことが不可欠との認識が浸透してきたことなどが挙げられている（太田・白石, 2008）。

一方の中国に目を向けると、とくに21世紀に入り、中国から海外へ留学する学生は増加しながらも、同時に、中国経済の顕著な発展が留学生の帰国を促進している。とくに2008年から2010年にかけては、先進国を中心とする経済危機の影響があり、帰国留学生数は急増した。その際の増加率は50%を上回った^{*2}。2012年には、帰国留学生数は約27.3万人に達し、過去最高の数にのぼった。2003年からの10年間に於いて、帰国留学生の総数は約93.8万人を数えるが、80万人近くは2009年以降に帰国した留学生である。王・鄭・董・鄧（2013）は、2019年までに、帰国留学生が、中国から出国する留学生の数を上回ると予測している^{*3}。

日本からの帰国留学生についていえば、大半の中国人留学生は、日本で3～5年働いた後に帰国するという報告がある^{*4}。もっとも、こうした帰国留学生の国別の詳細な統計は公表されておらず、日本からの中国人帰国留学生の変化もまた、正確に把握することは困難である。いずれにしても、中国の顕著な経済発展は、将来設計に関する中国人留学生の考え方を変えつつあるといえよう。

このような状況のもとで、日本で学業を修めた中国人留学生は、自身の人生のなかでキャリアの追及や家庭・家族との関係をいかに位置づけ、どのような将来を設計しようとするのだろうか。とりわけ、その将来設計において早期に判断を迫られる選択、すなわち日本での滞在あるいは母国への帰国について、いかなる選択がなされるのか。

本研究は、その決断に作用する要因を分析することを目的とする。とはいえ、広大な国土をもつ中国からの留学生の属性・背景は様々である。そしてこの多様さは、彼らの将来設計に少なからず影響を与えるものと考えられる。本稿は、こうした論点の整理に留意しつつ検討を進め、現代日本における中国人留学生を理解するための基礎研究のひとつになることを目指す。

2 中国人留学生に関する先行研究の検討と本研究の視角

戦後から今日に至るまでに、中国人留学生をめぐる先行研究は、数多く蓄積されている^{*5}。例えば、井口・曙光（2003）は、中国から日本への留学生の国際移動の決定要因を分析している。その結果は、中国の家計の教育負担能力の変化や日中の間の外国為替相場が影響を及ぼすことを示している。しかし、「一人っ子政策」については有意な影響が確認されていない。佐藤（2013）は、日米豪の私費留学生の学費、生活費、支援金等の経済的要因を比較し、日本留学の利点およびコストを考察している。この研究は中国人留学生に限定したものではないが、経済的要因が留学先の選択に与える影響を分析したものとして重要である。また、坪谷（2008）の研究は、中国人留学生の日本への流入ではなく、中国人の「留学」から「ソジョナー（sojourner）」に至る過程に注目するものである。坪谷は、個人のライフストーリーに着目し、中国人の滞在形態、アイデンティティを考察するうえでの新しい視点を提示した^{*6}。とはいえ、アンケート調査の分析に用いるデータの量的な限界や、回答者の職業の偏りは否めない^{*7}。

王雪萍（2013）は、改革・開放初期に派遣された中国政府の国費留学生、とくにその最終学歴を取得した後の進路について調査している。この調査が明らかにするのは、政策の意図と現実のギャップである。すなわち、当時の中国政府は、人材を迅速に育成するために国費留学生派遣政策を打ち出したのであるが、学位を取得後すぐに帰国した留学生の割合は非常に低かったのである。この研究は重

要であるが、限られた時期の国費留学生を対象にしており、大半が私費留学生である現代日本における中国人留学生について、参考にできるものは多くない。また、進路選択における留学生個人の要因に着目しているのみで、日中両国の経済社会的状況や労働市場などについての考察は十分とはいえない。

昨今では、中国への帰国留学生に対するアンケート調査からその帰国理由を分析したもの（王輝耀, 2013）や、中国人留学生の帰国率と同国の経済発展度（GDP）の正の相関関係を明らかにした研究（柳, 2013）もある。そのなかでも、中国人の出身地と国際移動について分析を試みた戴（2004）と志甫（2013）の議論に注目したい。戴（2004）は、中国人の出身地の影響の重要性を指摘したうえで、一国の中でも地域ごとに経済発展における時間差があることから、北京や上海から海外への人口移出の鈍化傾向を明らかにした。また、中国から日本への移動については、地理的・距離的な要因や歴史的要因の影響がみられるという。具体的には、東北3省からの出身者が急増しているという事実を述べている。志甫（2013）の指摘によれば、中国人留学生に関するデータには制限があり、その出身地域に着目した定量的な研究はほとんど存在しない。そのなかでも、吉林省出身者の日本での就職意欲が際立って高いこと、また、出身地域の経済成長の高さ、豊かさ、外国資本の存在感の大きさといった要素が、日本での就職意欲を抑制することが検証されている。これらの研究は、中国国内の経済、政策、社会、文化などを視野に含めているという点で重要である。一方で、本研究が着目する、帰国留学生の個人レベルでの将来設計に関する意思選択については、それを解明するための分析に欠けている。

留学生の個人の属性に注目した研究としては、大橋（1990）と戴（2012）が挙げられる。大橋（1990）は、留学生にとっての配偶者・家族の役割を重視する。その研究においては、「配偶者に日本語教育の機会を与えること」や「配偶者に仕事をみつけること」といった家族問題の重要性を指摘している。戴（2012）は、両親の老後の看護のために帰国した留学生は増えているとし、一人っ子世代の帰国意向の高さを指摘する。

上に述べた研究は、中国から日本への留学、滞在、帰国という行為を理解するうえで重要な知見を提供している。とはいえ、現代の中国の経済社会情勢の変化については、議論する余地を残しているように思える。一般論としては、日本で就職する理由としては、「日本語などの語学力を活かしたい」や「日本の学校で学んだ専門性を活かせるから」といったものが挙げられる^{*8}。しかし、中国人留学生の多様な属性についていえば、それが将来設計に与える影響は十分に吟味されてきたとはいえない。

そこで本稿では、先行研究でも取り上げられた留学生の出身地、配偶者、一人っ子といった要因に着目し、中国人留学生の日本留学後の将来設計への影響について検討を試みたい。具体的には、第一に、中国各地域で異なる経済発展度や日本との地理的距離などが、中国人の海外への移出にだけでなく、帰国や還流にも影響しているのではないかと考えられる。とりわけ都市出身の中国人留学生は、経済成長による雇用条件の向上などによって、留学修了後に帰国しやすいといった仮説を立てられるだろう。第二に、配偶者や恋人の有無が中国人留学生の将来設計に及ぼす影響を検証したい。第三に、一人っ子世代の中国人留学生についてである。現代日本における中国人留学生は、1980年代以降生まれの者が主流である。80年代生まれは、「一人っ子政策」の実施開始後の第一世代と認識され、その後の90年代生まれの若者も含め、それまでの世代とは大きく異なるパーソナリティを有していると言われている。こうした事情を踏まえ、一人っ子という属性が中国人留学生の将来設計にどのように作用するのか、考察したい。

表1 アンケート回答者の属性

性 別	男性 27.7% (97 名), 女性 72.3% (253 名)
年 齢	20 ～ 32 歳
地 域	北海道 1.1% (4 名), 東北 2.0% (7 名), 関東 53.4% (187 名), 中部 6.6% (23 名), 近畿 16.0% (56 名), 中国 1.1% (4 名), 四国 1.1% (4 名), 九州 10.3% (36 名), 不明 8.3% (29 名)
種 別	国費 21 人 (中国政府・日本文部科学省両方含む) 6.0% (21 名), 私費 94.0% (329 名)
学 種 ^{注1}	大学学部 18.5% (65 名), 修士・博士前期課程 53.3% (186 名), 博士・博士後期課程 6.3% (22 名), その他 8.0% (28 名), 不明 14.0% (49 名)
在籍状況	在学者 67.7% (237 名), 卒業・修了者 18.0% (63 名), 不明 14.3% (50 名)
出身地 ^{注2}	東部 52.0% (182 名), 中部 14.0% (49 名), 西部 10.3% (36 名), 東北 23.1% (81 名), 不明 0.6% (2 名)
配偶者・恋人	有 40.0% (140 名), 無 59.7% (209 名), 不明 0.3% (1 名)
一人っ子	一人っ子 80.0% (280 名), 非一人っ子 186% (65 名), 不明 1.4% (5 名)

出典：調査結果にもとづき筆者作成，以下の図表も同。

注1：「学種」における「その他」には，日本語学校，研究生，高等専門学校，短期大学が含まれている。

注2：『中国統計年鑑』の地域区分を基準にしている。東部：北京，天津，河北，上海，江蘇，浙江，福建，山東，広東，海南。中部：山西，安徽，江西，河南，湖北，湖南。西部：内モンゴル，広西，重慶，四川，貴州，雲南，チベット，陝西，甘粛，青海，寧夏，新疆。東北：遼寧，吉林，黒竜江省。本研究で実施したアンケート調査のデータは，海南，チベット，寧夏，新疆の4省を除き，以上に記した全ての地域が含まれている。

日本社会は，留学生を今後いっそう多く受入れることが予想される。一方で中国社会は，急増する帰国留学生とどう向き合うべきかという問題に直面することになる。このような現状において，中国人留学生の将来設計に関する意識や，彼（女）らを取り巻く状況について，その変化とともに明らかにする研究には一定の意義を見出せるであろう。

3 調査概要

本研究における議論は，中国人留学生（元留学生を含む）を対象として実施したアンケート調査およびインタビュー調査の結果にもとづいている^{*9}。アンケート調査は2014年9月に実施され，総計350人分のデータを回収した^{*10}。調査票は添付資料としている。表1は，アンケート回答者の属性をまとめたものである。在学者は被回答者の大半を占めているが，元留学生である卒業・修了者も一定数いること^{*11}，また，本調査の回答者が女性と修士課程に偏っている^{*12}，といった違いにも気を留める必要があらう。

インタビュー調査は，2013年6月から9月にかけて，筆者の知人を中心にスノーボールサンプリングを行い，関東，関西，九州在住の16名の中国人留学生を対象として実施した。使用言語を中国語とした非構造化インタビューである。表2は，その回答者リストである。本研究では，このインタビュー調査の結果も，議論を補足するために用いている。

4 調査結果

(1) 全体的傾向

まずはアンケート調査の結果から，中国人留学生の将来設計に関する全体的な傾向をまとめておく。とくに本稿では，本人の将来設計において比較的早期に判断がなされるだろう選択，つまり学業

表2 インタビュー回答者リスト

記 号	性 別	出身地	配偶者・恋人	一人っ子	将来の予定
A	女	上海市	無	○	帰国（上海市）
B	男	浙江省	無	○	帰国（浙江省）
C	男	黒竜江省	無	○	日本滞在（10年以上，永住資格希望）
D	男	遼寧省	無	○	日本滞在（3～5年，永住資格希望不明）
E	女	遼寧省	無	○	帰国（都市未定）
F	女	河南省	有（日本で就職）	○	日本滞在（10年以上，永住資格希望）
G	男	山西省	有（日本で就職）	○	日本滞在（10年以上，永住資格希望）
H	男	河北省	有（進路は未定）	○	帰国（北京市）
I	女	陝西省	有（中国で就職）	○	日本滞在（3～5年，永住資格希望）
J	女	遼寧省	有（中国で就職）	○	帰国（北京市）
K	男	湖南省	有（日本で就職）	○	日本滞在（10年以上，永住資格希望）
L	女	遼寧省	無	○	帰国（都市未定）
M	女	北京市	無	○	帰国（北京市）
N	男	北京市	有（中国で就職）	○	帰国（北京市）
O	男	広東省	無	×	帰国（広東省）
P	男	浙江省	無	×	帰国（上海市）

を修了した後に，日本に引き続き滞在するか，もしくは母国へ帰国するかという選択を，検討の対象にしている。

中国人留学生の将来設計のパターンに関する意識を，図1のようなかたちで整理しており，以下では，それに沿って説明を加える。有効回答数350のうち，日本に残ると答えたのは全体の半分以上を超えた（182名）。一方，帰国と答えた割合は41%（145名）である。日本と中国以外の第三国に行くと選択した人は，全体の7%（23名）にとどまる。上記をそれぞれ「日本滞在型」「帰国型」「第三国型」と称すことにする。ここでは，主に日本で学業を修めた後，日本に残るか母国に帰るかという選択に注目したいため，第三国型については議論の対象外としたい。

上に述べた「日本滞在型」については，更に三つのタイプに分けることができる。永住資格を取得する意思がないタイプ，回答時には考えていないタイプ，取得意思があるタイプである。上記をそれぞれ，「永住資格非希望型（以下，非希望型）」「未定・不明型」「永住資格希望型（以下，希望型）」と称すことにする。182人のうち，「希望型」は115名で，その比率は63%に達している。それに対し，日本に滞在する期間を3年以内としている「非希望型」は12人，「未定・不明型」は55人である。

上の結果から，日本滞在志向がある中国人留学生の大半にとって，永住資格は魅力的なものであると考えられていることがわかる。ただしここで留意したいのは，永住資格を希望するものすべてが実際の永住を希望しているとは限らないということであり，こうした傾向は先行研究にも見られている（坪谷，2008）^{*13}。本調査によれば，永住資格を欲する者の41.7%は，それが日中間の移動に便利であるためと回答している。すなわち，旅行・観光の際にビザを申請しなくてもいいというのである。その他貿易・ビジネスを展開しやすい，長期滞在が可能となる，といった回答もある。

帰国型の内訳をみると，故郷に帰るという回答の割合は44.8%（65名）である。故郷以外の都市で就職するとする割合は同じく44.8%（65名）となっている。しかしそのなかで，故郷に近い都市に就

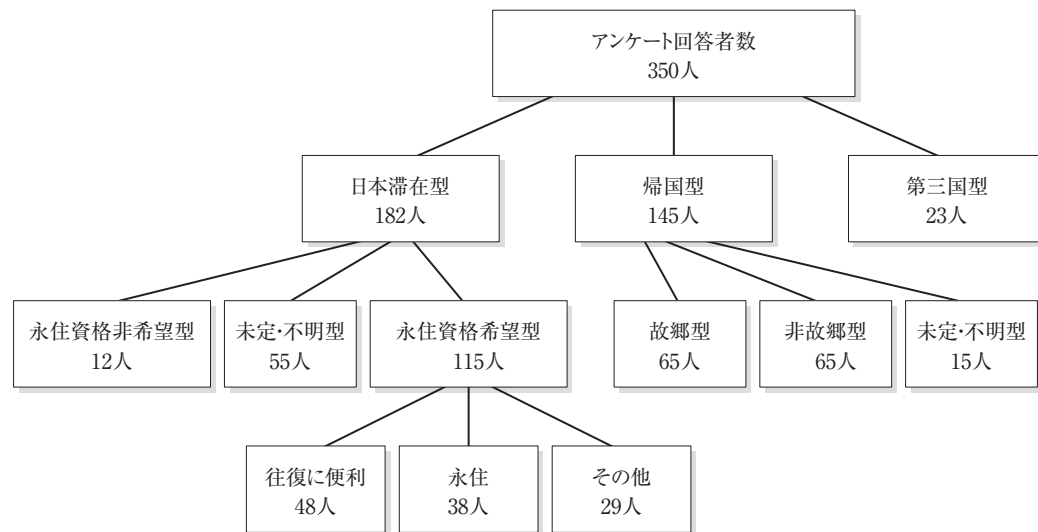


図1 中国人留学生の将来設計に関する意識のタイプ

職するという回答者は35名いる^{*14}。例えば河北省の出身者は北京へ、江蘇省の出身者は上海へ、湖南省の出身者は広州、深圳へといった傾向がある。この現象の背景には、後述するように、大都市を中心とする経済圏の形成があると思われる。故郷または故郷の近くに就職する人を合わせると、帰国を選択する留学生の69.0%を占めている。それ以外で、複数の都市を記述した人は「未定・不明型」と類型した。

アンケート調査にもとづくと、男女別にパターンの違いがある。男性の36.7%が「帰国型」であるのに対し、女性のそれは47.3%である。「帰国型」と対照的な「日本滞在型」の下位カテゴリーである「希望型」の男女別内訳に注目すると、男性の47.8%に対し、女性の場合の割合は31.6%にとどまっている。性別と将来設計パターンにおける「帰国型」・「希望型」を変数とし、カイ二乗独立性検定を行ったところ、有意であることがわかった($X^2=3.899$, $df=1$, 有意確率.048)。

日本に残る理由については、図2にまとめている。「日本の環境がきれいだから」が、最も高い比率を占めている。近年、中国では空気汚染などの環境問題が深刻化していくなか、日本の環境は中国人にとっていっそう魅力的になっているようである。注目したい点は、「日本の賃金水準は高いから」(34.1%)が4位にとどまっているという結果である。つまり中国人にとって、日本の賃金水準は、重要なプル要因とはいえなくなっている。中国の高度経済成長が都市部の賃金を向上させているという事情もあるだろう。

帰国する理由については、図3で示している。故郷ないし故郷の近くで就職できること、就職する都市に親戚・友人がいること、親孝行、精神的な満足度に、高い回答率が出ている。つまり、将来設計において、家族との関係や精神的な満足度が重要視されていることがわかる。こうした理由は、本研究で焦点を当てる留学生の出身地、配偶者・恋人の有無、一人っ子といった属性などにも深く関わるものと考えられる。

以上の議論を踏まえ、日本で学業を修めた留学生の日本での滞在もしくは母国への帰国を中軸にした将来設計のパターン（以下、将来設計パターン）を四つに分けてみたい。第一に、日本で学業を修め

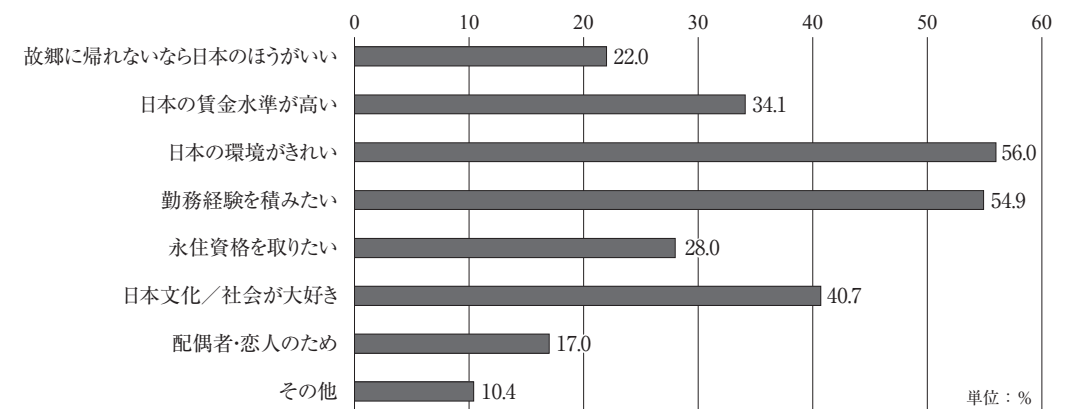


図2 日本に滞在する理由

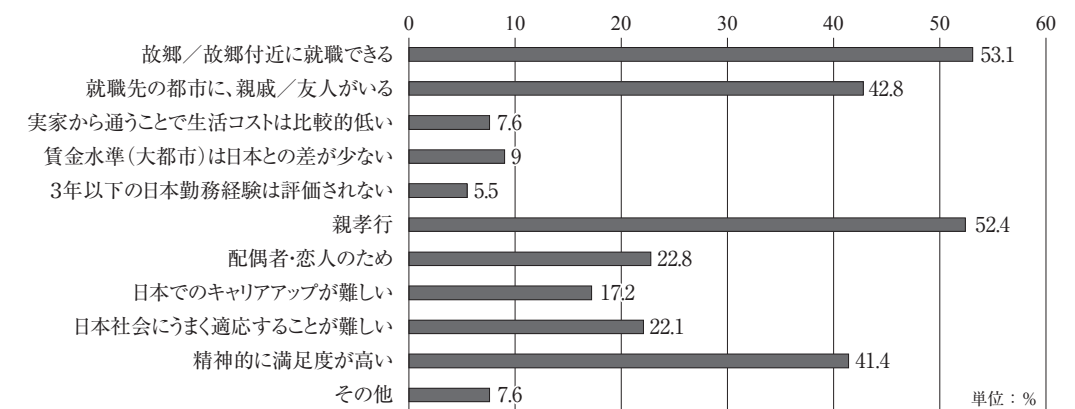


図3 帰国する理由

た後、すぐに帰国するグループである（図1の「帰国型」145名）。故郷かそうではないか、という違いはあるが、日本を離れるという意味を持っている点で、一括りにできる。第二に、卒業後・修了後、一定期間は日本にいたが、勤務経験を積んで帰国し、永住資格も望まないグループである（「非希望型」12名）。日本での滞在は3年以内であるが、最終的には母国に戻るという点で、「帰国型」と後述する「永住型」の間にあるともいえるが、サンプル数でみれば、ごく一部である。第三に、日本に引き続き残るが、滞在予定年数や永住資格の希望については明確なビジョンを持っていないグループである（「未定・不明型」55名）。第四に、永住資格を求め日本に滞在するグループである（「希望型」115名）。このなかで実際の永住を希望する回答者は三分の一程度であり、日中間の行き来に便利であるといった理由を挙げる回答者のほうが多い。とはいえ彼（女）らは、卒業・修了後にも、日本社会との関係を積極的に持ち続けようとする意図を持つグループということで共通している。

以下では、本稿が着目する留学生の出身地、配偶者・恋人の有無、一人っ子といった属性の影響を考えていく。先にも述べたが、学業を修めたあとにすぐ母国に戻る「帰国型」と、理由はどうか学業卒業・修了後にも日本に残る「日本滞在型」のうち、日本社会との繋がりを求める「希望型」は対

表 3 地域別将来設計パターン

将来設計パターン 出身地域	帰国型	非希望型	不明型	希望型	合 計
東 部	76	5	26	62	169
	45.0%	3.0%	15.3%	36.7%	100.0%
中 部	22	0	7	16	45
	48.9%	0.0%	15.6%	35.5%	100.0%
西 部	15	2	9	8	34
	44.1%	5.9%	26.5%	23.5%	100.0%
東 北	31	3	12	32	78
	39.7%	3.8%	15.4%	41.0%	100.0%
合 計	144	10	54	118	326
	44.0%	3.1%	16.5%	36.1%	100.0%

照的なグループであるといえる。サンプル数から考えて、この二つのグループの差異についても検討を加えることは妥当であろう。

(2) 留学生の出身地

1990 年頃まで、中国からの移民の主要な移出地は、北京・上海といった高所得地域であった。しかし中国の経済発展に伴って、主な移出地はその他の沿海諸省など中所得地域へと変化している（戴、2004）。また、中国の急速な経済発展に伴う専門人材に対する需要の増加や、中国の大都市と留学先国との経済格差の縮小は、帰国留学生の急増の主な要因である（戴、2012）。こうした先行研究を踏まえ、以下では、中国各地域出身の留学生の将来設計の結果を見てみよう。

表 3 は、出身地域と将来設計パターンのクロス集計の結果である。欠損値のある 1 サンプルを除き、326 の回答が得られた。東部地域出身者は最も多く、169 名（51.8%）である。その次は、東北地域出身者の 78 名（23.9%）である。中部と西部は少なく、それぞれ 45 名（13.8%）と 34 名（10.4%）であった。法務省が公表している在留中国人の本籍地統計と比較すると、本調査では東北出身者の割合が若干小さいものの、各地域の分布は概ね一致している^{*15}。

アンケート調査の結果にもとづく、各地域の間で、将来設計パターンの違いに統計的に有意な差異は現れない（ $X^2=9.182$, $df=12$, 有意確率 .687）。東北出身者は、「帰国型」の割合が他と比べると最も低く、「希望型」の割合が最も高いが、それでも統計的な連関はみられない。

なお、インタビュー調査のなかでは、就職後の賃金水準と生活コストを総合的に考慮すれば、出身地に帰ることが魅力的である、といった意見が聞かれた。故郷で就職できる留学生にとっては、賃金水準が日本より低いとはいえ、生活コストを低く抑えることができるため、豊かに過ごせるという考えにもとづくものである。例えば、以下のような発言がある。

日本で就職すると、初任給は 20 万円前後。そのなかから家賃や食事代とか使う。家賃とか生活コストを除いたらあまり残らないと思う。だけど上海に帰ると、実家に住んでいるから、外食以外は食費もかからないし、給料は全部小遣いになるわけ。だったら、何のために日本に残るのか

表 4 配偶者・恋人の有無別将来設計パターン

将来設計パターン 配偶者・恋人の有無	帰国型	非希望型	不明型	希望型	合 計
配偶者・恋人有	55	2	24	51	132
	41.7%	1.5%	18.2%	38.6%	100.0%
配偶者・恋人無	90	8	29	67	194
	46.4%	4.1%	14.9%	34.5%	100.0%
合 計	145	10	54	118	326
	44.3%	3.1%	16.5%	36.1%	100.0%

（中略）。周りの上海出身の友人は、私と同じように思っている人が多い。（上海出身の A 氏、2013 年 6 月 24 日、東京都内にて聞き取り）

修士課程を修了したあとは日本で就職する（大手企業に内定をもらっている）。中国に帰っても鄭州（河南省）には帰らない。北京や上海といった大都市は生活コスト高すぎる。給料の半分は家賃に使ってしまうから。（河南省出身 F 氏、2013 年 7 月 15 日、茨城県つくば市にて聞き取り、括弧内は筆者による）

こうした意見はインタビュー調査においては散見されるが、出身地による帰国意志の違いをアンケート調査から確認することはできなかった。中国には、主に都市と農村間の格差、都市および農村内の格差、沿岸部と内陸部等の地域間格差という三つの格差がある（牛嶋、2006）^{*16}。このことは、人の国際移動における出身地要因を詳細に分析することの重要性を示唆している。今後は、中国の地域経済の特徴を反映したデータ収集と考察が求められるだろう。

(3) 配偶者・恋人

ここでは、配偶者・恋人の有無と中国人留学生の将来設計の関係を見てみよう。表 4 で示すように、欠損値のある 1 サンプルを除き、回答数は 326 である。配偶者・恋人がいる留学生は 132 名であるのに対し、配偶者・恋人がいない留学生は 194 名である。後者の割合が若干高い。配偶者・恋人のいる留学生の 41.7% が「帰国型」である一方、配偶者・恋人がいない留学生が「帰国型」の割合は 46.4% である。「希望型」に注目すると、前者は 38.6% であり、後者は 34.5% である。

表 4 から配偶者・恋人の有無が将来設計パターンに与える影響を確認することはできない。しかし配偶者・恋人の国籍そして進路先国を分析すると、以下のことが分かる。配偶者・恋人のいる 132 名の相手の国籍をみると、中国国籍は 114 名、日本国籍は 16 名、第三国国籍は 2 名である。90% 近くが中国国籍である。ここで、第三国国籍は分析の対象外とする。

表 5 で示すかたちで、配偶者・恋人の国籍、または進路先国を正確に記した 124 のサンプルを使い、配偶者の進路先国と中国人留学生の進路先国についてカイ二乗独立性検定を行った。両者に連関があることが分かった（ $X^2=83.060$, $df=1$, 有意確率=.000）。表のなかで、中国型とは、中国にいて、あるいは中国で進学や就職する予定であることを示し、日本型も同様である。配偶者・恋人の進路先等が本人の将来設計にも影響を与えるということは、大いに考えられる。もっとも、恋人と配偶者を

表5 配偶者・恋人と中国人留学生の進路先国

中国人留学生の進路先国 配偶者・恋人の進路先国	中国 (帰国型)	日本 (日本滞在型)
中国型	47名	6名
日本型	5名	66名

同列視できないことに留意したい。既婚者にとって、配偶者、子供を含む家族という存在は、自身の将来を決める際に大きく影響することは想像に難くない。回答者全体に占める卒業・修了者の割合は20%以下であることから、既婚者は少数であると考えられるが、恋人関係との違いは明らかではなく、この点は本研究の限界として指摘できる。

なお、男女別の状況を見てみると、配偶者・恋人を考慮する女性が48.9%にのぼっているのに対し、男性の場合は28.6%と低い水準にとどまっている。すなわち、男女の間には、配偶者・恋人の有無が将来設計に及ぼす意識の差が確認される。インタビュー調査においても、配偶者・恋人について以下のような発言があった。

彼氏がもう北京で就職したから、私も帰らないと。

(遼寧省出身の女性のJ氏、2013年7月28日、東京都内にて聞き取り)

中国に帰りたい理由はいくつかあるけど、結婚のストレスはその一つ。若いうちに探さないと、だんだん難しくなる。修了する時点で25歳になるわけだし。男だったら30歳になっても不利にならないけど、女の人はそうじゃないから。

(遼寧省出身の女性のE氏、2013年6月24日、東京都内にて聞き取り)。

彼氏がいないから、親に進学することを反対され、早く帰ってきてほしいと言われている。

(北京出身の女性のM氏、2013年8月15日、東京都内にて聞き取り)

以上のことから、配偶者・恋人は、その有無に関わらず、自らの将来に影響を与えていることが窺える。

いずれにしても、20代から30代前半の中国人留学生のなかでは、男性よりも女性のほうが、配偶者・恋人の存在を将来設計に組み込んでいると解釈できる。その背景には、中国社会全体の女性の結婚年齢に対する厳しい目線があると考えられる。近年、北京や上海などの都市部では晩婚化が進んでいるが、「25～27歳」が女性の理想な結婚年齢だと言われている^{*17}。一方、多くの男性は結婚年齢を考えるより、自らのキャリアの土台を固め、経済的に独立し、将来において持つであろう家庭を支えることに努めようとする^{*18}。中国人留学生のなかでも、日本に残り、勤務経験を積み、永住資格を取得したいとする回答者の割合は、女性より男性のほうが高い。

(4) 一人っ子

先行研究では、近年の中国における帰国留学生数の急増の社会的背景として、一人っ子世代がある

表6 一人っ子・非一人っ子別将来設計パターン

将来設計パターン 一人っ子属性	帰国型	非希望型	不明型	希望型	合計
一人っ子	106	10	41	102	259
	40.9%	3.9%	15.8%	39.4%	100.0%
非一人っ子	37	0	11	15	63
	58.7%	0.0%	17.5%	23.8%	100.0%
合計	143	10	52	117	322
	43.7%	3.1%	15.9%	35.8%	100.0%

表7 一人っ子・非一人っ子別出身地

出身地域 一人っ子属性	東部	中部	西部	東北	合計
一人っ子	135	30	23	70	258
	52.1%	11.6%	8.9%	27.0%	100.0%
非一人っ子	32	13	10	8	63
	50.8%	20.6%	15.9%	12.7%	100.0%

と言われている(戴、2012)。以下では、一人っ子留学生と非一人っ子留学生の将来設計に関する意識を考えてみたい。表6が示すように、欠損値のある5サンプルを除き、322名分のデータがある。

兄弟姉妹のいない一人っ子は259名であり、非一人っ子の留学生は63名である。つまり、本サンプルに基づくなら、日本における中国人留学生の5人に1人は兄弟姉妹がいるという計算になる。一人っ子の「帰国型」は40.9%に対し、非一人っ子の「帰国型」は58.7%に達している。「希望型」を見てみると、一人っ子の39.4%に比べ、非一人っ子は23.8%にとどまっている。通説と異なり、本調査では、一人っ子の留学生よりも非一人っ子の中国人留学生のほうが、帰国を考えているという傾向が確認された。一人っ子・非一人っ子という属性と日本滞在(希望型、不明型、非希望型の合計)・母国帰国(帰国型)という将来設計パターンは、カイ二乗独立性検定の結果、有意確率.011で連関している(X²=6.504, df=1)。

なお、一人っ子と非一人っ子の出身地の比較からは、以下のことがわかる。表7で示すように(欠損値のある1サンプルを除き)、一人っ子、非一人っ子に関わらず、サンプルデータの特性上、東部出身者が半分程度を占める。差がみえるのは、非一人っ子の割合であり、中部と西部出身者の比重が比較的高く、東北出身者が比較的少ない^{*19}。一人っ子政策における第二子出産条件と地域の違いの一端がここに現れている^{*20}。

両親の意見に関していえば、一人っ子と非一人っ子の間に違いが観察される。表8の示すように、欠損値のある1サンプルを除き、258名の一人っ子において、両親の意見として一番目立ったのが、本人の意思に委ねるというものである。帰国を望んでいるという回答は約3割である。一方、非一人っ子の両親の半分以上は、子女の帰国を望んでいる。「本人の意見に委ねている」のは、約4割にとどまる。日本滞在を望んでいる割合をみれば、非一人っ子は一人っ子の半分である。すなわち、一人っ子・非一人っ子の両親の意見の傾向は、留学生本人の将来設計パターンの傾向と一致している。

表 8 一人っ子・非一人っ子別両親の意見

両親の意見 一人っ子属性	帰国を望む	日本滞在を望む	本人の意思に委ねる	その他
一人っ子	84	34	133	7
	32.4%	13.1%	51.4%	2.7%
非一人っ子	34	4	25	0
	54.0%	6.3%	39.7%	0.0%

なお、両親の意見における「その他」には、回答例として、「私の意見に委ねていると言っているが、実は帰ってくることを望んでいる」「しばらく日本にいてもいいけど、最終的に帰ってくることを欲している」「どこにいてもかまわないけど、一緒にいることを強く望んでいる」といった意見があった。

インタビュー調査においては、「親孝行のため」と述べる帰国志望の留学生は多々いたが、「一人っ子であるから」といった理由は聞かれなかった。例えば、以下のような発言がある。

どうせ帰るなら、早く帰りたい。祖父祖母もいるし。親孝行のことはもちろん考えるよ。一人っ子だからじゃなくて、みんなそう考えているんじゃないか。
(浙江省出身B氏、2013年6月24日、東京都内にて聞き取り)

推測するに、親の世話や家族との繋がりを理由として帰国を考える留学生にとって、一人っ子であるか否かは関係ないと思われる。親孝行は美德であるという伝統文化や、子供の頃から受け続けてきた教育の影響が、その背景にはあると考えられよう。とはいえ、表6からもわかるように、一人っ子が非一人っ子より高い割合で永住資格を希望する。前者が後者より自らの希望を優先する傾向が強く、兄弟や姉妹を持つ非一人っ子は、中国にいる家族との結びつきをより重要視する、と考えることは可能だろうか。

一人っ子が多い中国人の若者世帯では、家族の繋がりが強いものの、両親に強く縛られるものではなく、子女の意思が尊重される家族関係が窺える。このような環境で育ってきた一人っ子世代は、自らの希望を第一に将来を設計する傾向があるといえる。また本調査では、先行研究で言われているように、両親の老後に介護のために帰国するという傾向も確認されたが、一人っ子であるかどうかが要因とはみなしがたい。

近年、少子高齢化を防ぐため、中国政府は従来の一人っ子政策を緩和した新政策を打ち出した^{*21}。同政策が緩和された場合、一人っ子世代は異なる特有の性質を帯びる世代になる可能性がある。留学を含め、その将来設計の背後にある価値観や実際の行動パターンを理解するためには、さらなる検証が必要である。

5 結 論

中国からの国際人口移動、とくに日本への移動・移住についての従来の研究のなかでは、日中両国の経済・社会的背景や政策についての分析は豊富である。一方で、それを補完できるような、移動の主体である中国人の将来設計に関する意識や考え方に目を向けた研究は十分とはいえない。本稿では、

出身地の違い、配偶者・恋人の有無、一人っ子という属性にもとづいて、そうした要因が中国人留学生の将来設計に与えうる影響について考察を試みた。

本調査によれば、出身地の違いは、中国人留学生の将来設計に目に見える影響を与えていない。ただしこの点については、すでに述べたように、地域間以外でも生じている経済格差を考慮した精度の高い分析が求められる。中国人留学生の出身地についての統計データと先行研究は非常に限られているが、本研究の対象である中国人留学生のみならず、人の国際移動・移住を左右する重要な変数の一つと考えられるため、調査設計を改善し克服すべき課題である。また、先行研究で指摘されていた東北出身者の日本での高い就職意欲という事情については、本調査の結果を見る限り、裏付けることができなかった。

配偶者・恋人の有無についても、それ自体が中国人の将来設計に及ぼす具体的な影響を指摘することは難しい。しかし配偶者・恋人の進路先国は、中国人留学生本人の将来設計に作用すると考えられる。また、男女差は生じており、女性である場合のほうが、配偶者・恋人の有無が日本での滞在中中国への帰国という選択に作用しやすい。20代から30代前半という調査対象者の年齢層を考えると、就職や結婚といった人生における重大な事柄について、男女では優先順位が異なると解釈できる。婚姻市場において、女性には「若さ」が求められている一方、男性には「経済力」が問われているという事情を、あらためて裏付ける結果となった。

一人っ子という属性については、一人っ子ゆえに母国の家族のもとに戻る意思が強く働くという先行研究や通説と一致しない結果が得られた。一人っ子であろうがなかろうが、母国の両親の近くで暮らしたい、親孝行をしたいという気持ちに差異はない。その両親の意見は、一人っ子と非一人っ子の間で異なる傾向が観察された。また、一人っ子のほうは、その将来設計において、より強い独立性を持ち得るということが示唆された。いずれにしても、一人っ子であるということが、その将来設計にいかなる形で影響を及ぼしうるかは、別の要因とも絡めて慎重に判断をすべきだろう。

今回の調査結果から確かに言えるのは、中国人留学生にとって、留学後に日本に残るか母国である中国に帰国するかという選択は二元論的な決断ではないという点である。日本に滞在したいとする中国人留学生にも、その動機は実にバリエーションに富んでいる。留学生の受入れ拡大を通じた人材の獲得を目指す日本にとってみれば、日本に残るか残らないかで迷う留学生たちの複雑な心情を理解することは重要である。中国側にとっても同様である。

本研究において実施した調査は、日本で学ぶ中国人の将来設計に関する意識に焦点を当てたものである。この研究は、先行研究の内容を鑑みつつ、検証を行うべき論点や仮説を抽出、整理している。分析上の課題は少なからず残しているが、留学を含む人の移動・移住に作用する諸要因について、その有効性を個別に明らかにするための手がかりを得ることができたと考えている。以下もまた今後に引き継ぐ研究課題であるが、本稿では、日本で学業を修めた後の中国人留学生のその後の行動について、踏み込んだ考察を行っていない。つまり、留学生の希望、期待、計画と現実が一致するかどうかについて、そしてその条件について、分析の余地を大に残している。今後は、留学生の理想と現実の間に横たわるギャップについても念頭に置き、日本で学ぶ留学生の将来設計とその実態について、幅広く究明する必要がある。また、本研究は、現代日本における中国出身留学生に限って分析を試みたに過ぎない。日本にいる他国からの留学生との比較や、他の国へ留学する中国人との比較も不可欠であると考えており、今後は、留学生の将来設計についての包括的な研究を目指していきたい。

*1 文部科学省「留学生 30 万人計画骨子の策定について」(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm, 2015 年 6 月 24 日アクセス)。

*2 「海归比例近 75% 中国迎来史上最熱“回归潮”」(和訳「海外帰国者の割合が 75%に近く、中国は歴史的な帰国ムードを迎える」), 國務院ホームページ (<http://www.gqb.gov.cn/news/2015/0325/35373.shtml>, 2015 年 8 月 8 日アクセス)。

*3 王・鄭・董・鄧, 2013, 「総報告」, 『中国海帰発展報告』(2013) No. 2, ANNUAL REPORT ON THE DEVELOPMENT OF CHINESE RETURNEES (2013) No. 2, 社会科学文献出版社, 7 頁。

*4 「在日中国人留学生の第 1 選択肢, 『就職後に帰国』」人民網日本語版 (<http://j.people.com.cn/n/2015/0119/c94473-8837592.html>, 2015 年 12 月 6 日アクセス)。

*5 例えば岡・深田 (1995) の研究は, 留学生の受入れ政策, 中国の留学生派遣政策, 在日中国人が抱える諸問題, 日本企業への就職と就職意志の規定因などについて, 幅広い知見を提示している。浅野 (1997) は, 日本で学ぶアジア系の研修生・留学生・就学生についての議論のなかで, その人生観と将来指向についても言及している。佐藤 (2010) は, 留学生政策の目標の達成状況と, 留学生がもたらす経済便益についての実証的分析を行っている。

*6 出稼ぎから定住への線形モデルに対する批判として, 「帰国」と「留まる」ことの間で迷う「ソジョナー」または「永続的ソジョナー」という概念を用いている。

*7 有効回収数は 200 程度であり, 調査対象者には, 大学等において研究・教育職に従事する男性が多い。

*8 労働政策研究・研修機構 (2008 年)「日本企業における留学生の就労に関する調査」, パソナグループ (2012 年)「外国人留学生の日本企業への就職に関するアンケート」を参照。

*9 本稿の中国人留学生 (元中国人留学生を含む) は, 正規課程在学者の他, 日本語学校や専門学校の学生も含まれている。ただし, 実際に, 大学学部生, 修士課程, 博士課程が全体の 78.1%に及んでいる。

*10 筆者が所属する大学に在籍する中国人留学生を中心にアンケート調査票を配り, 70 人分のデータを回収した。あわせて, 中国の調査サイト「問巻星」にてアンケート票を作り, アンケート票のリンクをウェーボーやフェイスブック等のソーシャルネットワークに上げ, 回収した。中国調査サイト「問巻星」ホームページ (<http://www.sojump.com/>), 本調査のアドレス (<http://www.sojump.com/jq/3819667.aspx>), 調査表公布期間: 2014 年 9 月 20 日～2014 年 12 月 18 日。二重回答が発生していないことは確認済みである。

*11 在学組 (237 名) と卒業・修了組 (63 名) に分けて分析したところ, 将来設計における選択の傾向について, 両者の間に大きな違いは見られなかったため, 本稿では全体のデータを用いている。ただし例外的に, 卒業・修了組においては, 在学組と異なり, 後に述べる要因のひとつである「一人っ子」は有意な要因としてみせなかった。

*12 アンケート回答者のうち, 一定数は筆者の所属する大学院 (文系) に在籍する知人であり, これは本調査の回答者の属性に偏りを生み出している理由のひとつと考えられる。「結婚」に対する意識が高い層であり, 本文でも後述するように, 性別は中国人留学生の将来設計にも一定の影響を与えているものと考えられる。中国人留学生のうち女性の文系修士が占める割合が多い調査例として, 松井ほか (2011) が挙げられる。なお 2014 年度, 日本の高等教育機関に在籍する中国人留学生の男女別数はそれぞれ 38,812 人と 38,980 人である (2015 年 9 月 16 日, 日本学生支援機構への問い合わせによる)。また, 同年度, 学部, 修士課程, 博士課程に在籍する中国人留学生数はそれぞれ 40,055 名 (42.4%), 14,169 名 (15.0%), 5,713 名 (6.0%) である (2016 年 1 月 18 日, 日本学生支援機構への問い合わせによる)。

*13 坪谷 (2008) は, 「将来的に中国に帰国すると考える者が, 日本に永住する予定の者よりも倍近くおり, さきの永住者資格の高い取得率との間にギャップがみられる」と指摘する。

*14 何の基準に基づいて「近い」と判断するかは難しいが, ここでは回答者本人が帰国する理由に「故郷付近に就職できる」の選択の有無によって判断する。

*15 本稿が基準とする中国地域区分によって各地域出身者の合計を計算したところ, 東部 281,351 人 (46.4%), 中部 45,801 人 (7.6%), 西部 39,080 人 (6.4%), 東北 239,789 人 (39.7%) であった。政府統計「都道府県別本籍地別外国人登録者 (その 1 中国) 2011 年」(<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001111183>, 2015 年 8 月 10 日アクセス)。

*16 王 (2004) は, 中国における都市と農村及び地域間の調和的な発展の難しさを論じている。

*17 全国婦連中国婚姻家庭・中国婚活サイト「百合網」が発表した「全国婚恋調査報告 2010 年」によると, 女性の理想な結婚年齢について, 92.2%の男性は 27 歳以下だと考え, 男性でも女性でも, 半分以上の人は 25 から 27 歳を最も良いと考えている (<http://wenku.baidu.com/view/1598711a6bd97f192279e996.html>, 2015 年 9 月 6 日アクセス)。

*18 女性が結婚相手に経済力を求めていることについて, 男性はプレッシャーを感じている。「全国婚恋調査報告 2010 年」によると, 男女とも, 男性の「安定的な収入」(85.9%), 「持ち家がある」(57.6%), 「貯金がある」(53.8%) が結婚の条件として上位を占めた (<http://wenku.baidu.com/view/1598711a6bd97f192279e996.html>, 2015 年 9 月 6 日アクセス)。

*19 なお, 一人っ子と非一人っ子を学種 (学部, 修士・博士前期課程, 博士後期) や種別 (私費, 国費) ごとに比較しても, データ上の偏りはみられなかった。

*20 例えば, 各地区の計画出産条例により第 2 子出産が許可される例外的な場合がある。農村部住民については, 第 1 子目が女兒の場合, 出産間隔を 4 年から 5 年あげるとともに, 母親が 28 歳以上の場合に第 2 子の子の出産が許可される (河北, 内蒙古, 山西, 遼寧, 吉林, 黒竜江など 18 の地区)。寧夏, 雲南, 青海, 広東, 海南の 5 地区では, 第 1 子が男児でも第 2 子の子の出産が認められる (若林, 1994)。

*21 実施時期は地域により異なるが, 2014 年春から順次, 第二子出産要件が「夫婦ともに一人っ子」から「夫婦のどちらかが一人っ子」へと緩和された (張・王, 2014)。

《参考文献》

日本語

- 浅野慎一, 1997『日本で学ぶアジア系外国人——研修生・留学生・就学生の生活と文化変容』大学教育出版
- 牛嶋俊一郎, 2006「中国における所得格差の拡大——中国の高度成長の持続可能性との関連で」『東京経大会誌』第 249 号, 27 ～ 43 頁
- 太田 浩・白石勝己, 2008「留学生 30 万人計画 達成の条件は? 太田浩・一橋大学国際戦略本部准教授に聞く」『アジアの友』第 464 号, 2 ～ 11 頁
- 王雪萍, 2013「日本への中国国費留学生の進路選択——改革・開放初期の学部留学生へのインタビュー調査を通じて」『現代における人の国際移動——アジアの中の日本』慶應義塾大学出版会, 279 ～ 311 頁
- 大橋敏子, 1990, 平成元年度文部省科学研究費補助金 (奨励研究 B) 研究成果報告書「外国人留学生のための社会的・文化的適応におけるオリエンテーションに関する研究」
- 岡 益巳・深田博己著, 1995『中国人留学生と日本』白帝社
- 佐藤由利子, 2010『日本の留学生政策の評価——人材養成, 友好促進, 経済効果の視点から』, 東信堂
- 佐藤由利子, 2013「日本留学の利点とコスト——日米豪の私費留学生の学費, 生活費, 支援金等の経済的要因の比較から」『留学生教育』第 18 号, 25 ～ 34 頁
- 志甫 啓, 2013「中国人留学生の日本での就職意欲と彼らの出身地域の関係——出身地域の経済情勢の影響に関する一検証」『国際学研究』第 2 号, 57 ～ 69 頁
- 戴二彪, 2004「『中国新移民』の移出地構造の変動——経済発展の国際人口移動への影響」『経済地理学会年報』第 50 巻, 46 ～ 52 頁
- 戴二彪, 2012「中国人の国際移動の新段階: 頭脳流出から頭脳循環へ」『新移民と中国の経済発展』(ICSEAD 研究叢書第 9 巻), 多賀出版, 137 ～ 160 頁
- 坪谷美歌子, 2008『「永続的ソジョナー」中国人のアイデンティティ——中国からの日本留学にみる国際移民システム』有信堂
- 松井めぐみ他, 2011「中国人留学生の就職意識の特徴——岡山大学における調査から」『留学生教育』第 16 号, 107 ～ 116 頁
- 若林敬子, 1994『中国人口超大国のゆくえ』岩波書店

中国語

- 柳学智, 2013「中国海归人才发展趋势研究」『中国海归发展報告 (2013) No. 2』社会科学文献出版社
- 王輝耀, 2013『中国海归发展報告 (2013) No. 2』社会科学文献出版社
- 王輝耀・郑金连・董庆前・郑莹, 2013「总报告」『中国海归发展報告 (2013) No. 2』社会科学文献出版社

・ 王梦奎, 2004「中国现代化进程中的两大难题：城乡差距和地区差距」『农业经济问题』2004 年第 5 期

・ 张丽萍・王广州, 2014「“单独二孩” 政策目标人群及相关问题分析」『社会学研究』2014 年第 1 期, 中国社会科学院社会学研究所

資料

各位

在日中国人留学生の将来設計に関する調査ご協力をお願い

拝啓 残暑の候、ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

筑波大学人文社会科学研究科の馬文甜と申します。現在わたしは、在日中国人留学生の将来設計について研究を進めており、その一環として、以下の通りアンケート調査を実施しております。

回答していただいたデータは統計的に処理され、個人が特定されることはありません。皆さんにご迷惑をおかけすることはありません。どうか率直なご回答をお願いいたします。なお、調査の結果は修士論文の執筆のみに利用いたします。

ご多忙中のところ誠に恐縮ですが、以上の主旨をご理解いただき、この調査にご協力くださいますようお願い申し上げます。

敬具

平成 26 年 8 月 26 日

筑波大学人文社会科学研究科
2 年 馬 文甜
Email:mawentian9011@yahoo.co.jp

1. 卒業または修了後、あなたは中国に帰りますか？
a. 帰る（2 番へ） b. 日本に残る（4 番へ） c. 第三国に行く

2. 中国に帰る場合、どこで就職しようと考えていますか？
(例：都市名など)

3. なぜ中国に帰りたいですか？以下に挙げているものの中から選択してください（多選択可。多選択した場合、優先順位をつけ、番号を振ってください）。（この質問の次ぎは 7 番です）

a. 故郷、或いは故郷に近い都市に就職ができるから

b. 就職を希望する都市に、親戚や友人がいるから

c. 就職後実家に通うことができるため、生活コストは日本に残る場合より低い

d. 大都市の賃金水準は日本との差がそんなに大きくないから

e. 日本で積んだ少年数の勤務経験は中国で評価されなくなるから

f. 親孝行のため

g. 配偶者・恋人は中国にいるから、或いは帰る意志が強いから

h. 日本でキャリアアップを図ることが難しいから

i. 日本社会に上手く乗り込むことが難しいから

j. 中国で暮らしたほうが精神的に満足度が高いから

k. その他_____

4. 日本に残る場合、何年間程度日本に留まりたいですか？

a. 1 年未満 b. 1～3 年未満 c. 3～5 年未満

d. 5～10 年未満 e. 10 年以上 f. わからない

5. 永住資格を希望しますか？

a. 希望します b. 希望しない c. そこまで考えていない

a を選択した場合、理由を簡潔に記述してください。（中国語でも可、キーワード、箇条書きでもかまいません）

永住資格を希望する理由：_____

6. なぜ日本に留まりたいですか？以下に挙げているものの中から選択してください（多選択可。多選択した場合、優先順位をつけ、番号を振ってください）。

a. 中国に帰っても故郷に帰れず、どうせ第三都市に行くなら日本にいたほうがいい

b. 日本の賃金水準は高いから

c. 日本の環境がきれいだから

d. 日本で勤務経験を積みたいから

e. 永住資格を取りたいから

f. 日本文化、日本社会が大好きだから

g. 配偶者・恋人は日本にいるから、或いは日本に残る意志が強いから

h. その他_____

7. あなたの帰国に関して、ご両親はどのような意見を持っていますか？

a. 帰ってくることを強く望んでいる

b. 帰ってくることを望んでいる

c. 日本に残ることを望んでいる

d. 日本に残ることを強く望んでいる

e. あなたの意思に委ねている

f. その他_____

あなたのプロフィールについて教えてください。

性別：男・女 年齢：____歳 来日年月：____年____月

所属（大学名等・学部／研究科）：_____

学年：_____ 卒業・修了見込み年：_____ 種別：国費・私費

中国における出身地：_____省_____市

中国における最終学歴：高卒・大卒・院卒

最終学歴を取得した学校の所在地（都市）：_____

配偶者・恋人の有無：有・無

配偶者や恋人の出身地：日本・中国（_____市）

配偶者や恋人の進路（予定）：進学（_____国_____市）・就職（_____国_____市）

兄弟の有無：有・無（一人っ子か否かを確認するため）

名前（任意）：_____ 連絡先（任意）：_____

アンケートは以上です。ご協力をありがとうございました。

An Analysis of the Future Plans of Chinese Students in Contemporary Japan

MA Wentian

University of Tsukuba

Key Words: Chinese in Japan, foreign students, future planning

As of May 2014, there were about 184,000 foreign students in Japan, among which the percentage of Chinese foreign students was about 51.3%. At present, the proportion of Chinese students in Japan has declined, but they continue to form the majority of foreign students in the country. On the one hand, Japan will accept more foreign students and global talent. On the other hand, with China's growing economy, the number of Chinese students who choose to return to their country after studying abroad has increased. Therefore, Japan should consider ways to promote foreign students' acceptance and increase employment opportunities for them, while China should come to terms with the current situation of increasing returnees. And then, the study which noticed Chinese foreign students' deep awareness is necessary.

This article aims to understand the future paths of Chinese foreign students and their economic or social backgrounds. At the same time, I will pay attention to the characteristics of Chinese foreign students. Through questionnaire and interview surveys, an analysis will be conducted to examine how three characteristics—hometown, having a partner or being single, and whether one is an only child or has siblings—influence the future paths of Chinese foreign students.